巻頭言

天災を忘れないように するために

平野 啓子 ひらの けいこ
語り部・大阪芸術大学 教授・武蔵野大学非常勤講師

今年3月11日に起きた東日本大震災で、予想を超えた大津波により多くの方々が犠牲になった。今なお続く行方不明者の捜索。避難生活も長期化する見通し。負けるな！と声をかける一方で、誰もが無力感を感じていると思う。ただただ一日も早い復興を祈るばかりである。昔から日本は幾多の災害を乗り越えてきた。世界でも、これほど多様な自然災害が発生する国は稀である。台風、集中豪雨、地震、津波、火山噴火、豪雪……そしてそれによる地すべり、土砂災害、洪水などもある。地震が多く、火山活動も活発なのは、日本がプレート境界に位置するためだという。地形が急峻なことや、火山灰が堆積している地質、降水量の多い気象など、災害がいつどこで起きても仕方ないような条件を抱えている宿命でもある。「日本書紀」に地震の記録があるし、「古事記」のヤマタノオロチは川の氾濫のことを言っているともいわれている。今は、津波に関心が集中しているが、これからの季節、山津波といわれる土砂災害のことも気になる。

「sabo」に執筆するに当たって、以前から気になっていた「崩れ」（幸田文作）を熟読する機会を得たのは、「語り」を職業にする私には嬉しい限りだ。富山の鳶山の崩れなど、有名な崩れがいくつも綴られていて、著者が70歳を過ぎて崩れに魅かれた理由、自然への畏怖の心が伝わってくる。幸田文の父、露伴が描いた「五重塔」は既に何度も上演しており、風雨にびくともしない五重塔を建立する大工の姿に感動する、と最近特にリクエストが多い。「崩れ」と、このタイミングで出会うのは何かの縁か。これもいつか上演したい。

人は自然の猛威の前にはきわめて弱い存在だ。人工的な構造物による対策も必要だが、危険が迫ったときには、早めに安全な場所へ避難するしかない。

災害の体験を伝え続けることは、とても大切である。前述した「崩れ」には、作者自身が若いときに、長雨が続き、東京・伊皿子（いさらご）の傾斜地にある自宅の家の中に、腰の高さまで土砂が崩れて入ってきた経験が書かれている。土から足を抜くのが容易ではなかった様子などが手に取るようにわかる。まさかと思えるような都心部での土砂崩れの貴重な記録だ。

沼津出身の私は、子どものころ、津波が来たときの心得を大人からよく聞かされていた。夏休みの海水浴場で、浮き輪で遊んでいるときに、サイレンが鳴れば、一目散に引き上げる準備をした。津波の教訓は地元の民話にもある。例えば、伊豆下田の「波きり地蔵」。親孝行の息子が、見知らぬ老人から「津波が来る。高いところに逃げなさい」と忠告される。息子が山に登ると、しばらくして大津波が村を襲う。また老人が現れ、「波は何度も来るから戻るな」と言う。その老人は昔から村に祀られていた波きり地蔵だった、という話だ。津波と聴いたら、ともかく一刻も早くひたすら高台へ逃げ続けなさい、という普遍的な教訓の民話で、犠牲者を一人でも少なくしたいとの願いを込めて伝えられてきたものだ。

スマトラ沖地震の際に注目された「稲むらの火」の話も、明治三陸地震津波の被害に心を痛めた小泉八雲が、和歌山県に伝わる故事から英文で書き残したものだ。また、同じ和歌山県で、約120年前にトルコの船エルトゥールル号が難破したときに、トルコの人を日本人が助けた話は両国で伝えられていて、現在の友好親善に結びついている。私や私の語りの仲間は、「稲むらの火」「エルトゥールル号海難事件」「波きり地蔵」など防災や共助に役立つ話を、国連防災世界会議や日本ユネスコ国内委員会、東京消防出所式、防災講演など語りのボランティア活動として語っている。

内閣府中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」では8年間にわたり、過去の25の災害についての調査を行い、昨年度、報告書をまとめた。防災の専門家でない私も参加させていただいたが、引き続き、先生方の資料提供に基づき、子どもにもわかりやすい短い体験集を作成することになった。「天災は忘れたころにやってくる」と昔からよく言われるように、絶えず災害教訓を伝え続けることが各人の「心の備え」につながる。

そして、なにより命を守るための日頃からの訓練が大事だ。私は今、芸能・文化人で構成する「がんばれ消防応援団」の一員であるが、消防職員や消防団員の消火、水防、救助などの訓練を間近に見ると、とても頼もしい。その訓練で培われた力をもって、災害発生時には、取材カメラも踏み込んで行けないようなところまでどんどん入って救助活動をするのだ。自衛隊、警察もそうなのであろう。このほか、「人命を守る」ためには、私たち国民一人一人も、ハザードマップなどにより身近な防災に関する正しい知識を持つとともに、避難訓練などに進んで参加することが大切である。